

BOOK REVIEW

人生のヒント
VOL. 7



このコーナーでは、
毎回異なるブックナビゲーターに、
人生やライフプランを考える上での
ヒントとなる本をご紹介します。

REVIEW. 2

寂しい生活

稲垣 えみ子 著

[東洋経済新報社刊、2017年
6月、1,512円]

ただ普通に生きていくだけで、持ち物は増え、当たり前ですがそれを買うための支払も増えます。手元に現金がなければローンを組んで、自分の将来の稼ぎまで前借りして消費します。今どき大小に関わらず借金のない人なんてほとんどいないと思いますし、それが経済社会の仕組みでしょう。しかし、そうして得られた豊かな現在が、心に重くのしかかり、気分を曇らせている一面もまたあるはずです。

著者は原発事故後に始めた節電をきっかけに、徐々に持ち物を減らし、今は家電製品を使わない生活を送っています。面倒くさい家事の負担を軽くするための機械。

それを捨てた途端に訪れた心の変化とは？



ブックナビゲーター
おうらいどう
往来堂書店

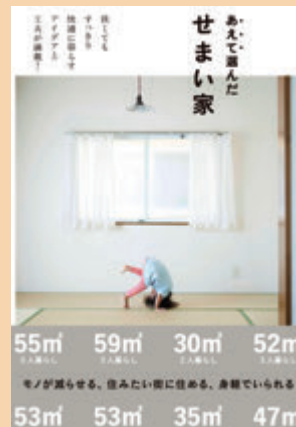
町には本屋が必要だ。というか、必要とされる本屋になりたいと思って、東京は千駄木の町で20坪の店を開け続けています。



REVIEW. 1

あえて選んだ せまい家

加藤 郷子 著



[ワニブックス刊、2016年12
月、1,404円]

「家はひろい方がいい」。この
思い込みから自由になった先に
見えてくる暮らしの形とは？

同じ場所ならせまい方が家は
安い。ひょっとして共働きの必要がなくなるのではないかな。同じ予算ならより都心に近いところを買える。通勤がだいぶん楽になるのではないかな。ものが増えてしまうのは置き場所があるからではないのかな。この本を読むと、家はせまい方が様々な無駄や手間が省けて良いのではないかな、という気持ちになります。

私たちににとって一番貴重なものは何か。ひとつの考え方ですが、それは「時間」ではないかと思います。お金はいくらでも無限に稼げる可能性があります、時間は有限だからです。

せまい家をあえて選択することの向こうに、この一番貴重なものを無駄にしない考え方があるような気がしました。

REVIEW. 3

文学効能事典

あなたの悩みに効く小説

エラ・バーサド、
スーザン・エルダキン 著
金原 瑞人、石田 文子 訳



[フィルムアート社刊、2017年6月、2,160円]

「文学なんて何の役にも立たない。文学で飯が食えるのか？」大学の文学部に進学したい子どもに、苦労人の親が言い放ちます。子どもは、「役に立たないからこそ、人生を豊かにする良いものなのだ。役に立つものだけで埋め尽くされた人生は、息苦しいじゃないか」「役に立たないものを極めることで、逆に世の中に必要とされる人間になってやる！」など、壮大な野心を抱いているかもしれません。

そんな親子にこの本はお勧めです。目次を見れば、「悪魔に魂を売り渡したくなったとき」から「わけもなく恐怖を感じる時」まで、生きづらさの緩和に役立つ世界中の小説が紹介されています。

文学が人生でどんなふうに役立つのか、それを教えてくれる一著です。